2017. 10. 30.

おいい図書館

No.194
発行 おいい図書館
代表 青木和子
松戸市牧の原1-104-416
TEL. 047-311-0886

講演会「地域づくりの核となる図書館」

坂本由喜子

9月30日(金)、松戸市立図書館市民講座として、松戸市民劇場で開催されました。

講師の嶋田学さんは、岡山県に新設された瀬戸内市民図書館長として2011年に着任されました。以前は滋賀県東近江市立図書館等に勤務し、経験を積まれました。瀬戸内市民図書館では「図書館は何が出来るか」を課題としつつ町づくりに参加し、新しい市に相応しい図書館づくりに邁進しておられると拝察しました。

瀬戸内市は2004年に町村合併で出来た、岡山市のベッドタウンのような町です。人口約3万8千人。市長は図書館整備を公約に掲げて当選したそうです。

図書館は合併から7年後に完成。この図館館のメイン・コンセプトは「もちより、みつけ、わけあう広場」。略して「も・み・わけ広場」だそうです。

図書館の役割は「市民が自らの知的欲求に気付ける場づくり」と「市民がつながり、地域を活気づけるための場づくり」と述べられ、図書館を利用する人の立場に寄り添って、子ども・小中高大学生・高齢者のそれぞれが抱えているテーマに沿って、「家庭」「働く」「相談」などのテーマで「も・み・わけ」をしていきたいと結ばれました。

とても分かり易い講演会でした。

図書館をつくるとは本当に息の長い仕事であり、社会と共に発展すること、そして利用する人が図書館を育てていく責任があることを気付かせて頂きました。長野県塩尻市や瀬戸内市の図書館による町づくりなど、行政がその地域の人々のニーズを汲み取り、市民と共に町づくり・人づくりをしていく姿が好ましいと思いました。TV等に取り上げて欲しいような出来事がたくさん紹介されました。

もうひとつ、これまでの本を貸す・借りるだけの場所という図書館を生まれ変わらせるには、図書館長をトップとする組織の仕事ぶりと市民の意識が大きく影響することを、またも実感しました。

♪♪♪　県議　安藤じゅん子

図書館行政は、人口規模や財政力では比べられない。その最たる事例を、嶋田さんから教えて頂いた。

嶋田さんの言葉には不思議と引き込まれる力「言霊（ことだま）」があった。経験に裏打ちされた「図書館道」があった。

本を介した調べ学習にみる子どもの成長。セカンド・オピニオンという言葉は使わなかったが、自身の病状と治療法について相談にみえたおばあちゃまの納得感。図書館とは雑誌や小説がある所で、農業の仕事に役立つ情報があるとは考えてもいなかった農業従事者の驚き。

嶋田さんの取り組みは、時に迷いながらも、前を、周りを、丁寧に見ながら向き合い、語ろう。

当日も、フロアからの質問に丁寧に回答されていました。

私たちはこれまで、みんなで一船道路で法定速度を守るように豊かな生活を信じて走って来た。しかし、これからの私たちや子どもたちは、一人ひとりで一般道路や高速道路をそれぞれのスピードで多様性を認めながら生きて行く。困った時や工夫をしたい時にネット検索をかけるかもしれないが、ネット検索にはリアルもフェイクも混じっている。より質の高い、より耐久性のある知識は、知の集積地である図書館において供給さ（れ）続けることになるであろう。

あらゆる可能性を排除しない仕事や役割を担う場、世代を超えて、楽しい時も辛い時もどんな時も人間生活の全てに関わる場、誰に話しかけられても丁寧に寄り添い、いくつかの情報を用意している場、住民や利用者が大切に育てる場が図書館です。

図書館に対する考え方を、改めて考えさせられた機会でした。

多謝！

第103回全国図書館大会 東京大会 見聞録

塩崎俊一

10月12日(木)、気温29度の秋の夏日、代々木のオリンピック青少年総合センターで「まちづくりを図書館から」をテーマにして行われた。本年は日本図書館協会が創立125周年を迎える記念の年でもある。

オープニング・アトラクションで「図書館で会いましょう」を作詞作曲した弓削田（ゆげた）氏のリードで全参加者が合唱し、会は進行した。

基調報告は図書館協会理事長の森茂（もりあきお）氏。全国3261の図書館のうち、指定管理者導入が511に達している事や、司書の状況は自治体の正規

職員が減り、非正規・委託が増えて、H.20年から逆転した等の概要が示された。自治体の総合計画における図書館政策を位置付けしているのも50%に過ぎないと報告された。本年度予算の中で、教育基本法における生涯学習の観点での社会教育の文字が消えている事も指摘され、総じて高度な根拠に基づいた分析・提唱の報告であった。

大会記念講演は寺島実郎氏(多摩大学学長、日本総研会長)が世界の中の日本、日本の中の図書館と題して強い先見的提言をされた。参加者全員に配られた132頁に亘る膨大な資料から説明文脈の裏付けになるデータを示しながらの講演は、説得力充分で流石だった。

例えば、日本の中流階級の貧困化を立証する為、勤労者世帯の可処分所得を年次的に見て、97年をピークに21世紀に入って下ったままの数字を指し示す。人口減少と高齢化問題の指摘でも、総人口が2053年には'66年と同じく、1億人割れの水準になるにしても、65歳以上人口が全人口の6.6%だった'66年当時と38%予想の2053年という割合に触れ、シルバー・デモクラシーに言及。「老人の老人による老人のための政治」になることを危惧する。また消費動向の変化でも、21世紀に入り、各分野別で支出低下の中で光熱・通信関係だけ伸びている事を指摘。教育・娯楽関連の落ち込みを示しながら、いよいよここで図書館に関わるテーマに入った。

彼は、人生百歳時代の教育には「知の再武装」が必要であると、若者とのジェネレーション・ギャップも教育によって解答を見つけられると言う。図書館は知的財産の詰った身近な情報拠点だが、個人も知を集積するだけでなく、知の基盤をベースにして発信する能力をつけるべきだと力説された。

配架された本に触れるヒントとして「アナログ的な発想・ひらめきが大切だ」とも、個人的体験を語られ、自ら作られた東京九段下の「寺島文庫」には6万冊の蔵書もさる事ながら、人の集まる、参画のプラットホームとして課題解決の情報を発信し続けていると結ばれた。まことに、知の巨人に相応しい時代認識と提言だった。

坂本由喜子

私は大学図書館に関心があり、先端的な大学図書館について知りたいと思い、10月13日(金)、「第3分科会 大学図書館」に参加しました。

文科省所管の国立情報学研究所教授、尾城孝一氏によると、近年、学術論文のみならず、論文の根拠

となった研究データも含めて広く一般に公開し、再利用可能とすることで、科学者の営みをより促進しようというオープン・サイエンスが世界の潮流となっているが、日本の大学現場では普及しているとは言い難いとのことでした。

次に、大学図書館のリポジトリという話がありました。これからは、大学が研究した学術論文や資料などを電子的に保存し、管理し、さらに発信する機能をもつことが要請され、大学図書館の中でデータベースを作るという事のようです。

そのためには、リサーチ・アドミニストレーターという人材を育てる必要があり、図書館の中に新たな職種の専門家が必要になるとのことでした。

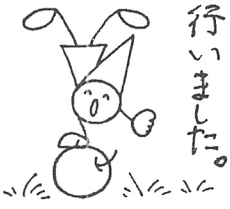
図書館には、一般的に情報発信機能は大いに期待されていますが、「大学図書館に期待される情報発信とは何か。専門的学術的論文は、政治や経済を揺るがすようなものがあり、オープン・サイエンスに馴染まないものがあるのではないか。発信しない自由は無いのか。」と、素朴な疑問をもちました。

「ITの発達と共に、私たちはどんな進化に出会うことになるのか。学問や学術が世界の競走戦略に巻き込まれる可能性を、どう防止しながら、その発展を期待するのか。」それを見守る必要があると思いました。

青木和子

10月13日(金)、「図書館友の会全国連絡会(図友連)」主催の「第20分科会 市民と図書館～指定管理者制度を考える～」に参加しました。

前半は基調講演。講師及びテーマは、①図友連代表 福富洋一郎氏「指定管理者制度を考える」、②元日本図書館協会事務局長 松岡要氏「指定管理図書館は制度から逸脱している」でした。

全国の公共施設への指定管理者制度導入は、スポーツや社会福祉関係ではかなり増えているが、図書館では15%に止まっている。昨年、高市総務相は、2008年の国会で「指定管理者制度は図書館には馴染まない」とした附帯決議を評価した。制度のあり方を無視する自治体の動きを正す規準を示した日弁連の「指定管理者制度基本条例案」を活かし、官制ワーキングプアを絶つ必要性等を話されました。

後半は、参加者が6グループに分かれて討論するワークショップ。最後に、各グループからの意見発表と全体での討議を行いました。